

製品になるための試練。



ホルベインでは油絵具の製造が終わると、4工程の製品テストを行います。中でも油絵具の置き味や伸びに影響する「粘稠度」を調べるのがスライドメーターという測定器具。まずは、非常に重い調整ロールで絵具を押しつぶします。そして、大きな押型に押しつぶされた油絵具の、かたちの広がり具合によって粘りやさくみを計ります。絵具は精密な製品。いくつものテストを乗り越えて、ようやく製品になるのです。ホルベインの命は品質です。

●20号チューブ(110ml)、全40色で新登場。大きいサイズだけど、品質は変わりません。



holbein

ホルベイン絵具

holbein

大久村綱夫

鷹見明彦 文 森田ケン 写真*印

夜警の刺繍、こげしさえも



1992年、金沢での初個展会場にて。広告業界をめざして、金沢美大デザイン科へ。グラフィック展などに憧れて上京するが、広告会社の現実に失望。下宿で描いていた油絵よりキャラクターを使った作品のほうがいいと言われて、ドラえもんの子キャラクターを集めた作品が生まれた。(背景作品「ドラエモン・ライス ビッグビーム」)1991 キャンバスにアクリル 260×582cm)



1994

「夜の警備員室で、早く時間を終らせるにはどうしたらいいかと思案するうちに、時計の向きを変えて遊んでいました」

マウンテンズ 1994 キャンバスに油彩
53×45.5cm (6点組) 撮影=奥村基

奥村綱夫、奥村綱雄、大久村つなお、大久村綱夫……。かれの名前は、変化していく。ロズ・セラウイ、あるいは歳をとるに従って名前を変えたむかしの芸人たちや複数の異名で作品を書いたフェルナンド・ペソアのような詩人に倣うようにして。そんなかれの暮らしぶりを見て、ある人はこう言った。「司法試験の勉強をしているみたいだね」。

たしかにアーティストも最難関の受験者と似たようなものかもしれない。だが、かれには与えられる問題がない。それでも、その喩えが似合うのは、世界を抑圧する法の網をくぐる手だてを考えつづける意志の堅さと、機知とユーモアを識る作品の切れ味において。

「最初は、広告の仕事をやりたいと思っていました。1970年代の終わりから80年代にかけて、浅葉克己のサントリーのTVCMに憧れて、電通が博報堂に入るところでデザイン科をめざしました」。

伊勢の高校から京都工芸繊維大



右上 夜盞の刺繡 1996 綿布にミシン糸
各15.5×25cm 撮影=奥村基
インスタレーション
右下 同ディテール
左 刺繡用具とガードマンの制服
撮影=奥村基



1996

「この作品を発表してからは、『あの刺繡しゅうの人』とよく言われるようになりました」

学と金沢美術工芸大学を受験して合格するが、グラフィック科のある金沢を選んだ。夢見た広告の世界と大学や地方都市の保守性にギャップを感じて、当時ブームのグラフィック界への登竜門だった日本グラフィック展とパルコのアーバナートをめざした。渋谷の公園通りのパルコの搬入口から、応募者の列が非常階段を8階から地上まで取りまいていました」。

何度か入選はしたが、大学3年になる前に休学して、1年間東京に出て、目白の版画研究所に通った。「ボククニや山本容子の作品に惹かれて、銅版画を学びました」。

金沢にもどって卒業後、86年に上京して、東池袋の広告プロダクションに勤めた。夢がかなう（？）西武百貨店やパルコのチラシをつくりながら、西武美術館の会員にもなると、同館発行の『アール・ヴィヴァン』などを購読しながら、現代美術を独習した。

「パルコのなかった時代、百貨店の



鼠 1999 1万円札 個人蔵

セールの広告は、切り貼り作業で月360時間の労働でした。2年で仕事をやめて、1年間は、映画などを見て暮らした。その生活から大手自動車メーカーの工場ラインの季節工として、半年周期で働く暮らしをはじめた。

《ドラエモン・ライフビッグベトナム》(1991)は、キャンバスにアクリル絵具で、ドラえもんに登場するサブ・キャラクターのみを集めて描いた初期作。金沢のギャラリーで発表後、東京での初個展に出品した。

「チャップリンのモダン・タイムス」のように自動車工場に働いて、あとの半年は下宿で大竹伸朗のような



こけし 2004 キャンバスに油彩
 大 41 x 24.2cm 小 33.3 x 24.2cm
 撮影 = 柳場大

2004

「日本人のつくるものは、立体でもフラットだとあらためて思いました」

油絵を描く生活でした。原宿のホコテン（歩行者天国）でも路上展を開いたりしましたが、あるとき、遊びでマンガのキャラクターを使った作品をつくったら、それを見た友人が『うちのほうが、断然おもしろい』というので、その気になりました。」「輪郭線太細遠近法と彩度遠近法」という2種類の遠近法を思いつきました。それによって同じ赤でも、手前には蛍光感のある赤を使っています」。

《マウンテンズ》（1994）は、キャンバスに油彩で描いた6点組の作品。このころからビルの警備員の仕事をやるようになった。夜の警備員室で、早く時間を経たせるにはどうしたらいいかと思案するうちに、3種類の時計の配置や置き方が変わる連作が生まれた。

《夜警の刺繍》（1996）は、夜警の待機時間中にひたすら布地にモノクロームのミンシ系を編み込んで制作した作品。文庫本のブックカバー・サイズ4点をつくるのに1年半

おおくむら・つなお（本名・奥村綱雄。奥村綱雄、大久村つなお、大久村綱夫などを名のる）

1962年三重県生まれ。86年金沢美術工芸大学商業デザイン科卒業。

おもな個展に92年インターナショナル・アート・ギャラリー（石川）93年ギャラリーNWハウス（東京）94,96年ギャラリー21+葉（東京）97年ギャラリー山口（東京）99年西瓜糖（東京）、2000年ギャラリーFLOOR2、96,00,01年藍画廊 東京 など、おもなグループ展は、97年『『美』と『術』』（藍画廊、東京）99年『誰でもピカソ?とんでもない』（ギャラリー21+葉、東京）2000年『公案』（ガレリア・ラセン、東京）02年『Jin Session』（ギャラリー人、東京）03年『CONFERENCE・会議』（MUSEE F+表参道画廊、東京）、04年『Integrate・組み合わせ』（表参道画廊、東京）など。

アート情報誌『etc.』連載の『日記にゃっき』（2000年5月号から03年4月号までの『平成貧乏日記?』は、一部に好評を博した。



南阿佐谷のアトリエ兼居室にて。夜警をしていたビルで不用になった鉢植えをもらって、作品に使用後、持ち帰って育てる。後ろのこけたちは、新作の絵のモチーフに購入してから愛玩している。壁の作品は、『Untitled at rest』（1999）の小皿*1]

《さようならウサギ》（2000）や、通路に点々と落ちた鍵をたどっていくと観葉植物の鉢植えにたどり着く《ソレルとグレイテル》（2003）などがある。いずれの作品のガジエツトも、夜警の仕事のなかから拾われてきた。「蛍光灯の点検は、職務のひとつですが、鍵の総取り換えで発

かかった。ガードマンの制服や刺繍道具一式とともに展示した。この作品を発表してからは、あの刺繍の人」とよく言われるようになりました。『歸』（1999）は、1万円の新札を表の図柄の縁飾りにそって切り抜いた作品。裏の雉の図柄による『鳥』と対をつくられた。その前の『トンネル、ロング・トンネル、落盤事故』という作品では、ギャラリーの床に湾曲させて立てた1万円札と5千円札2枚と同額の硬貨をそれぞれ放置しました。近作には、ギャラリーの照明を切れかかった蛍光灯に付け替え、加湿器から酢昆布の匂いを発散させた

《さようならウサギ》（2000）や、通路に点々と落ちた鍵をたどっていくと観葉植物の鉢植えにたどり着く《ソレルとグレイテル》（2003）などがある。いずれの作品のガジエツトも、夜警の仕事のなかから拾われてきた。「蛍光灯の点検は、職務のひとつですが、鍵の総取り換えで発

生するテッド・キーの処分もあります。『こけし』（2004）は、久しぶりに制作したペインティングによる新作で、油彩の7点ヲクト、民芸店で買ってきた伝統こけしをコンピニでコトして、それを元に描きました。正面だけを丁寧に描くこけしもそうですが、日本人のつくるものは、立体でもフラットだとあらためて思いました。表通りから葬儀屋の角をはいった路地のレトロな共同アパートの一室。作品に使った鉢植えを自室に持ち帰って栄養剤で育てるうちに、1年ほどで木陰をつくるまでに成長したという。若い作家の一部にカリスマ的なファンを持つ単独登壇者の孤独……。樹下にこけたちを従えて座したかれの肩を、秋の日の後光がやわらかく包んでいた。

2004年10月14日 東京・杉並区南阿佐谷の作家アトリエにて取材
たかみ・あきひ（美術評論家）